

地域研究雑感

梅原弘光

地域研究の語源は「エーリア・スタディーズ」である。この言葉が日本に入ってきたのは、戦争による破壊からの復興を終えた日本が再びアジアを中心に諸外国と新たな対外関係を持つようになる、その矢先の一九五〇年代後半のことであった。当時文部省はアジア研究振興策を模索中であつたが、一九五八年にはそのために別枠の科学研究費を設け、全国主要大学に約二〇の部門別共同利用施設、アジア地域総合研究施設を設置した。立教大学のそれは地理部門の共同利用施設であつた。五八年の末にはアジア経済研究所が財団法人（六〇年から特殊法人）として発足、六二年には京都大学東南アジア研究センター、さらに数年遅れて東京外国語大学にアジア・アフリカ言語文化研究所が設立され、戦後日本における地域研究の本格的幕開けとなつた。地域研究という概念が日本で用いられるようになるのはこの時期であるから、以来すでに四〇年近くになる。し

かし、その意味内容に今日統一的解釈ができていくかといふとそうではない。

「エーリア・スタディーズ」という言葉を私が初めて聞いたのは、大学三年の時であつた。当時広島大学文学部では、確か集中講義か何か特別講義の形で、アメリカ人教師による「アメリカ文明論」が英語で講じられていたが、よく聞き取れもしないのに興味半分ですれを受講した時のことである。その講義ではアメリカの歴史と文学が語られ、「エーリア・スタディーズ」とは紛れもなくアメリカ文明研究であつた。私はそのような理解をもつて大学を卒業した。その後、設立されて間もないアジア経済研究所に入つてみると、エーリア・スタディーズは研究所内のキー・ワードの一つになっていた。そこでは、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国のどれか一カ国を対象に基礎的、総合的研究を行うこと、つまり外国研究がエーリア・スタデー

ズであり地域研究であった。アメリカ文明研究とばかり思
い込んでいた私には真に不可解で、一つの言葉がなぜこの
ように全く別の概念を持つのかという点に大きな疑問を持っ
た。しかし、それが発生的理由によることを知るのにそ
れほど時間を要しはしなかった。つまり、多様な民族が多
様な文化を持ち込んで一つの国家を形成した合衆国で、今
世紀初頭にアメリカ人が自国であるアメリカとは何かとい
う問を発して自らの文明研究に乗り出したときに、その研
究をエーリア・スタディーズと呼んだのが始まりである。

その後関心が次第に異なった文明圏にも広がって一九三〇
年代には異質文明の研究を含むようになり、さらに第二次
世界大戦当時から交戦相手国など外国の研究を指すようにな
っていったからである。

地域研究の対象が地域であることはいうまでもないが、
この地域概念が統一見解に欠ける。一つは、地域が地域一
般かそれとも海外地域に限定されるのかという問題である。
最近刊行された『地域研究入門』^①あるいは『地域研究論』^②
といった書物では、地域研究は「各国別、各地域別の研究
であって、特別地域の総合的理解や他地域との対比をその
目的としている」、「地域（海外）の性格を明らかにする研
究」とし、『社会学事典』^③では「自国外の地域を地域とし
ての全体性において、諸個別科学間の協力を通じて把握す

ることを目指す研究態度もしくは研究の組織方法」として
はつきりと外国研究に限定している。

これに対して學術審議会學術國際交流特別委員会の「地
域研究の推進について」^④によると、地域研究とは「ある地
域について自然環境を含めて、その社会、文化を全体とし
て深く理解することを目的とする学際的、総合的な研究」
となっていて、地域を海外に限定するとはどこにもない。

また、『地理学辞典』^⑤では地域研究は地域一般の研究とさ
れ、地誌学として「近代地理学の主要な内容」をなしてき
たとされる。もっとも、狭義の地域研究では対象が海外地
域に限定される、と指摘している。

一般に地域を一つのまとまりのある地表空間と捉え、そ
れを有機体あるいは個体になぞらえて地域に個性、固有の
性格があるとみる傾向の強い地理学では、従来地域性の解
明が最終目標とされ、主として地誌学がそれを行ってきた。
そうした伝統があるために、地理学は地域研究をあくまで
地域一般の研究とみて、国内、国外の区別をしない。しか
し、地理学以外の社会科学諸分野では、エーリア・スタディー
ズの伝統を引き継いで地域研究を外国研究、海外研究に限
定する傾向が強い、といえそうである。

もう一つは地域の範囲についてである。地域という概念
の中には、小さな山間支谷、盆地、自然村から、行政村落、

広域行政地区、国家、隣接する幾つかの国家の連合地域、大陸まであって、それが地域研究の対象となる地域かという点が問題のようにみえる。その場合、どのレベルの地域を研究の対象として設定するかは、多分に研究目的と深く関わってくる問題であろう。一般的には、地域研究とは元来国家レベルの研究であるように思われる。私の場合、従来小さな村落研究を中心にフィリピン研究を続けてきたが、これはフィリピンの農業問題をより具体的に理解するため手段として選択した方法であった。

地域研究は独自の対象と方法をもった独自の社会科学の一分野か、あるいは研究の方法ないし考え方、視点かという点についても、議論の分かれるところである。先に触れた『地域研究論』では、対象を四つの地域概念に分け、方法をディシプリンと地域への習熟とし、地域研究者の存在を認めている。これに対して『社会学事典』でははっきりと「研究態度もしくは研究の組織方法」としている。

このように、地域研究は未だ了解の一致をみない部分が多く残しているが、それにも拘わらず多くの研究者から強い支持を受けてきた。それはなぜか、地域研究の魅力はどこにあるのであろうか。最大の理由は、おそらく、地域研究が既存科学の専門分野への批判から出発し、今日なおそれを堅持しているという点に求められるように思われる。

科学の専門分化によって分析方法の精緻化が飛躍的に進んだものの、現実社会が抱える諸問題には十分に応えられないという傾向が強い。専門領域の間にどちらからもカバーされない部分が残るとか、西欧社会を基礎として発達してきた既存の学問体系でどうしても捉え切れない別の価値体系あるいはシステムの存在が明らかになったからである。あるいはまた、従来地球環境を無限として組み立てられてきた多くの専門領域で、その大前提の変更を迫るような事態の展開を前に、既存科学諸分野の有効性の見直しが始まっているからである。こうした批判に対する一つの対応が、特定地域を固定しての問題への総合的、学際的接近の試みであった。アメリカ文明研究に始まって、異質文明研究、さらに外国研究へと向かったエーリア・スタディーズは、やはり個別研究領域の深化ではどうにもならない部分、欠落部分への挑戦であった。

この点を体現しているのが地域研究論でよく指摘される方法論的特徴である。これについても統一見解がある訳ではないが、一応、現地主義、学際性、共同研究、比較研究視点の四点については、多くの研究者の間で合意を得ているといえる。現地主義とは、まず対象地域の言語の習得、現地の社会への通暁、現地における人間関係、などがよくいわれる。これらの条件を満たすためにはなによりも現地

社会への長期滞在が必要となるが、それはひとえに当該地域に内在する固有の体系に接近するためである。

学際的接近とは、専門を越えた多角的接近を意味するが、これはまさに既存専門科学批判であった。これが地域研究の最大のメリットであり存在理由であろう。ただし、この学際性は個々の研究者の専門を捨てた接近をいつているのではない。そうではなくて、より深く専門領域に習熟した上で専門の枠を越えることの決意であろう。自分のディシプリンはあくまで堅持しつつ、他のディシプリンからも積極的に学ぶ柔軟な態度のことである。個別研究者のレベルで学際性を追及した場合には、成果がかえって浅薄なものになる可能性が高いからである。

真の学際性が実現されるのは共同研究においてであろう。ディシプリンの異なるものが同一地域を介して集まり、個別あるいは共同で調査研究を行い、共同討議を繰り返し、比較史、比較文化、比較地理学的視点を導入して地域に内在する論理、地域固有のシステムを掴む。そうした上で地域の課題に接近する。そうした営為から得られた新たな発見がそれぞれの専門分野にフィードバックされ、それが専門分野の進歩に還元されなければならない。その意味で地域研究を志すものは、まずもって自己のディシプリンを身につけること、研究対象地域への通暁が不可欠の前提とな

るように思われる。確固たるディシプリンを持たない地域研究は、単なる事情通の仕事と大差がなくなるであろう。南北問題といい地球環境問題といい、現代社会が抱える大きな問題はいずれも学際的接近を限りなく必要としている。その意味でも地域研究の方法論は今後ますますその重要性を増すと予想される。

注記

- (1) 鈴木一郎『地域研究入門』東京大学出版会、一九九〇年。
- (2) 山口博一『地域研究論』アジア経済研究所、一九九一年。
- (3) 見田宗介ほか編『社会学事典』弘文堂、一九八八年。
- (4) 学術審議会学術国際交流特別委員会「地域研究の推進について」『学術月報』三三一。
- (5) 日本地誌研究所編『地理学辞典』二宮書店、一九八九年。

(立教大学文学部教授)